

Title	<批評・紹介>錢莊資本論 香川峻一郎著
Author(s)	池田, 誠
Citation	東洋史研究 (1950), 10(6): 511-515
Issue Date	1950-02-25
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/145864">http://dx.doi.org/10.14989/145864</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

# 錢莊資本論 香川峻一郎著

〔佐藤圭四郎〕

昭和二十三年二月 實業之日本社刊  
A 5版 三〇六頁 價一〇〇圓

「錢莊資本論」と言われると何か人を戸惑いさせるような題目であるが、十數年の長きに亘つて中國に住み、中國の老銀行家に愛せられつ、「複雑怪奇な此國獨特の金融機構の一端を知つた」と言われる著者が、「種々の経験につれて中國經濟の醸し出す神秘性」につよく心惹かれ、「其謎を解く事」（以上序文）にいたく興味を覺えて、錢莊資本の問題を大きく取り上げられ、更に中國經濟の激しい變轉のさ中にその金融資本の取つた姿態が、我が國の社會的經濟的混亂という現實に於いて省みられつ成つたのが本書であるという事に先づ注意しておこう。わたしは著者香川峻一郎氏については、これ以上殆ど何らの豫備知識も持ち合わせないのであるが、氏の言われる「中國經濟の神秘性」或いは中國社會の「謎的性格」というものは、所謂中國社會の近代化の問題、延いて東洋の社會の問題とも深く關聯すると思われるので、こういった點をめぐつて本書について紹介して見度いと思う。

本書は第一章中華民國金融資本の展望、第二章中國金融資本の性格、第三章錢莊と財閥、第四章財閥と國民政府、第五章北四行系財閥の全貌の五章から成る。

第一章及び第二章に於いては、中國金融資本——特に錢莊資本の本質についての概観が與えられている。氏は中國の民族社會を貫く一大特色は、「動かす可からざる封建的性格と幫の思想との醸し出す極めて複雑なる神秘性にある」（三頁）とせられ、その神秘的姿態の一表現として、所謂中國金融資本——錢莊資本が論ぜられているのである。即ち中國の金融資本は「銀行資本と錢莊資本とそして其等を制約する幫の思想の三要素」（二頁）から成り立ち、此の「幫」の思想が財閥という形態によつて表現されて此の國獨特の金融資本が組織せられていると言われている。そしてこういった中國金融資本の本質の上に、外的な帝國主義勢力が加わつて、中國金融資本の封建的性格・買辦的性格・非生産的性格及び政治的性格、即ち半封建性が結果しているのであるとせられる。換言すればその實體は「共通利害關係に於ける絶對的相互信頼」であるところの「中國民族社會五千年の傳統的文化を有する漢民族の傳統的性格」といい、「決して歐米化するこゝのない」ところの「中國民族性に不拔の東洋的性格」といい、また「過去の遺風と嘲笑され、封建時代の殘滓と冷罵される一種の封建的性格」（四五—四六頁）というものが、中國の經濟社會にあつて現實化するとき種々なる社會的經濟的現象を派生するのであつて、「幫」の思想、錢莊資本の「底力」もその現われに他ならない。錢莊資本の特徵的な姿態である「對人信用の無限責任」組織も勿論こういった觀點から説明されている。そしてそこにわれわれの近代的感覺からはどう

あつても素直には理解されえない中國社會の神秘性があるものである。以上述べたような視點から錢莊資本、延いて中國の近代化過程に於ける金融資本をめぐる諸事象が捉えられているのであつて、ここに本書の重要な特徴の一つがあるように思われる。

次いで第三章以下に於いては、これ迄に述べられた中國社會の傳統的性格——東洋的性格——封建的性格の言わば金融資本の象徴である錢莊資本が、財閥の形成或いは政治的權力との結合に於いて、如何にその素暗しき邊まじさを發揮し、その神秘性を貫徹したかが、南北兩四行系財閥の勢力の消長變轉を辿つて具體的に論證せられている。それは、先に與えられた著者の中國社會觀は、ここに近代式銀行の言わば錢莊資本化——近代式銀行の「神秘的な中世への逆戻り」(五頁)として肉體化せられ、その中國金融資本のエネルギーこそ民主革命以後の數次にわたる幣制改革を推進し、遂に資本主義的常識からは到底納得出來かねるような「新匯劃制度」の成功に導いたものであるとせられる。まさにそう云つた中國金融資本に集中的に表現された強靱さ——資本主義への成功的な抵抗力の中に、著者は中國の「神秘性」そのものを感得しているのであつて、それは眺えて氏の中國の特殊性の再確認となる。更らに「この錢莊と云ふ封建的性格は纏て消滅する様な消極的な特性なのではなく、寧ろ中國自身の發展を約束支持する要因」(四九頁)という「封建的性格」の積極性の定立となり、「不拔の東洋的性格」——「五千年來の傳統性

格」の永遠化へと進んでいる事はその理由は後で考えるとして一應注意すべきであらう。

更らにそこでは、又著者の最も現實的な第二の課題にも自ら解答が與えられている。そして氏が、「日本金融資本は此國の錢莊資本の機能價值に殆ど認識が無く、あつても殊更らに過少評價して決してこれに傾ろうとしなかつた」(四二頁)事にこそ、日本の中國への認識不足の根本原因があり、従つて「此等錢莊の機能を細密に研究して徐ろに才略を立てた往時の英國金融資本の發展の慎重さ」(四三頁)には及ばなかつた日本人の「武士道的」對華政策こそが、兩國間に無益な葛藤を惹起したのであると言葉激しく詰め寄つてるとき、それは本書と殆ど時を同じうして刊行された根岸信博士の「中國社會の指導層——耆老紳士の研究」——(本書第十卷三號)を想起させるに充分であらう。

成程辛亥革命によつて一應舊い中國の殻は脱ぎ棄てられたものではあつたが、それでもなお根強く殘存し或る面では却つて強化される傾向をすら持つた所謂封建的諸關係の比重の大きさは、ここに氏も縷々述べて居られる通りであつて、革命以後の中國を考える場合片時も無視しえないものであるに違いない。此の點中國金融資本の特長的存在と思われる錢莊資本に關する氏の研究は極めて示唆に富むものと言わねばならない。氏によつて指摘せられた近代中國の持つ色濃い封建性——これがローマと共に永遠であるかどうかは別問題としても亦否定しえない眞實であらう。

ところで、「錢莊の價值判斷はそれを必要とする社會の實體をつきとめて始めて行はる可きで唯西洋流でない」と云ふ事に基いて爲すことはナンセンスに過ぎない」(四八頁)事は、誠に著者の言われる通りである。そしてそれは、氏がそれによつて「愛され」又同様に非常な親しみを感じた中國金融資本——錢莊資本の姿態が、その生々しい體驗の中からよくにじみ出ているように思われる。しかしその生々しい體驗がそのまま實體であるかどうか。またさういつた體驗の生々しさとそれが理論にまで高められているかどうかは別問題であらう。もとより本書によつて著者の必要とする「社會の實體」を突きとめることはさして困難な事ではない。しかし著者によつて強く主張されている中國社會の東洋的性格とか、封建的性格とか傳統的性格とか或いは帝國主義的勢力の攻勢だとかいつたものよりも、「一般中小工業金融のみならず、農村と云わず都市と云わず、一般庶民階級の金融迄支配している」(一〇頁)とごく秘めやかに語られている事實こそ、最も深く掘り下げられねばならぬ事柄ではないかと思われる。そしてこれが著者の所謂「悠久五千年の歴史と老成なる中國四億の民衆の生活」と言われるものに相違ないのであるけれども、「中國四億の民衆の生活」といい、また「一般中小工業……一般庶民階級」というものもしく簡單なものでもない。中國近代化への道が自生的に踏み出されたものではなかつた丈けにそこには激しい混亂と深刻な體驗があつた。近代資本主義的生産様式の前に、中國の農村と云わず都市と云わず、貧困

なる勤勞大衆の生活は破壊せられ、中産的諸階層の没落は決定的に進行して行つたのである。基本的にはまさにこゝ言つた中國社會内部の激しい階級分化と未成熟な近代化の上に、錢莊資本——買辦資本が寄生的に成長して來たのであつて、それを抜きにして錢莊資本を考える事は不可能であると思う。こゝ言つた人民大衆の生活に密接に吸着しそれに支えられてこそ「油じみた」錢莊資本が逞ましく存在するのであり、中國金融資本の特異性が「臆面もなく」發揮せられるのであつて、中國近代の社會經濟に於いて有する錢莊資本の比重の大きさも、このような金融機關を抜き難く存在せしめている基本的な諸事情を把握することによつて始めて正當な判斷を爲しうるものであらう。一方では諸都市に於ける近代式銀行に立ち混つて自己の存在を主張する錢莊、他方では中國の殆どあらゆる地方に深く浸透して地方の金融業務を一手に擔當している錢莊の所謂ローカルバンク的色彩の強さのうちに、われわれは近代中國社會の複雑さ——「神秘性」ではない——民衆の生活の重苦しさを感じる事が出来るのである。言わば、此處に中國近代社會の半封建的構造とか、中國金融資本の封建的性格とかが結論せられるのであつて、五千年來の傳統的性格——封建的性格——不拔の東洋的性格などによつては中國社會は到底説明され得るものではない。従つて本書では、著者が正しく主張された中國社會の「實體」の把握が充分に掘り下げられる事なく放置されて、錢莊資本の考察がその現實から浮上つて、著者の貴重な生々しい體驗が理論にま

で高まる事なしに終つてゐる。こう云つたところに、本書はそのままでは背し難い諸々の見解を生んでいるように思う。

と言うのは、本書で氏が最も基本的な據り處として永遠化した中國社會の傳統的性格——東洋的性格——封建的性格と言われるものこそ實いうと説明せらるべき最も重要な問題を含んでいるのである。更らに動かすべからざる封建的性格とか、中國社會の半封建的性格とか一種の封建性とか言われるものは一體どういふ事であらうか。「錢莊の基礎は悠久五千年の歴史と龐大なる中國四億の民衆の生活に深々根を下しているのである。この事實が封建的と云ふ所以である」(四七頁)と言われても、われわれには何の事だかさっぱりわからない。また前に何度も擧げたところであるが、中國社會の「動かす可らざる封建的性格」、「五千年來の民族的傳統」、「從つて財閥に包含された銀行資本は最早近代的文化から神秘的な中世期に逆戻りする」とか言われると、そこに著者の論理的混亂を感じざるを得ない。

そして彼の老大銀行家と同様に、恐らく共產黨嫌いであらうところの著者によつて與えられた中共觀のうちにも、われわれには到底納得し得ない主張を含んでいる。アヘン戰爭後特に民主革命以後の中國社會が、偉大な變化を経験しつつある事は勿論われわれの一般的な常識である。著者が躍起になつて帝國主義的侵略と同様の「外部の暴力」として無視しようとしてゐる中共の新民主主義革命への躍動も、實は矢張り「中國四億の民衆の生活」の中から生れたものである事こそ

最も正しく把握されねばならないと考える。辛亥革命と同様に新民主主義革命も亦中國社會の現實の要請によつて推進せられたつのであるであり、また中國々民黨が中國國であるのと全く同様に中國共產黨も亦すぐれて中國國である。國共の内争——農民と財閥との對立抗爭——中共と都市財閥との對立抗爭——ソ聯と財閥に融合した國民政權との對立抗爭——財閥國家とソヴェエト・ロシアの政治的鬭争(二二—二三頁)という氏の圖式こそ、中國の現實を無視したとんでもないナセンスではなからうか。實はそこから「中國共產黨と雖もソヴェエトによつて作られた中國に於ける農民主體の政權」(二三頁)という奇妙な定義が生れて來るのである。それでは中國金融資本の最大の基礎であると言われる地産は、一體何の爲めに存在するのであらうか。また「中國に於ける農民主體の政權」を強力に支えているであらうところの農民を除けば、中國の財閥、金融資本は一體何によつて生活して行こうと言うのであらうか。更に外國金融資本の要求する原料の輸出に於いて發揮すると言われる、錢莊の「最大限の獨占的威力」は一體何處から得て來たと言うのであらうか。ここまで來ると、氏が中國の經濟を把握する出發點となつた「中國經濟の主流は生産資本ではなくて金融資本であつた」(二頁)という獨斷が極めてよく理解せられる。しかし以上に指摘して來たような極めて特長的な氏の中國觀、中共觀は、却つて中國の地主、金融資本家或ひは民族ブルジョアジーの中共觀を反映してゐるように思われて誠に興味深い。

中國の近代化と言つても、それは決して生易しい道程ではない。著者も言われるように、單なる歐米化などでも勿論ないし、まただからと言つて中國社會の新たなる封建化などでも決してない。現實の中國社會の諸事情は、本書によつて強く主張されているような封建的諸關係によつて幾多の曲折を見また重苦しくそれを引きづりつつ、他方ではそれらの諸關係によつて益々鼓舞せられて、その特異な姿態を身に纏いながらも近代化の過程を前進しつつある事は言う迄もない所である。錢莊も勿論そういったものの域外にあるのではない。成程實弊の性格とかに現われた錢莊の前期的性格は、その強さに於て特長的であるには違ひない。しかしそれも馴えつて中國社會の非近代的構造、またそうであるが故に壓倒的にしかかつて来る帝國主義的勢力との必死の對決という現實に於いて、始めて理解せられ得るのではないかと思われる。從つて錢莊資本の逞ましさというものも、それは資本主義的近代に對する中國社會の東洋の性格の貫徹と言うよりも、如何に中國社會が非近代的構造を克服し切れないうで居るか、また非近代的な中國社會が帝國主義的勢力と對決する必然的結果として理解すべきものであらうと思ふ。そしてそれと共に、武漢に於ける反革命を契機とし、國府の抗日總力戰の呼號と相俟つて、中國社會の支配的階級が、本書によつて明らかにされているようにその封建的勢力との緊密な連繫、延いて封建的性格の強化という面の現われた事は、最も興味ある現象と言ねばならない。そう言つた中國社會の力關係の動きが、

本書に於いて甚だ一面的にはあつたが錢莊資本——中國金融資本の變轉のうちに明らかにされているのは中國革命史の研究の上に大きな寄與を爲すものと言ふ可きであらう。

甚だ勝手な事はかり述べさせてもらつたが、わたしは金融方面の事については文字通り全くの門外漢であるので、その方面に於いて本書の擄うべき意義については殆ど觸れるところがなかつた。從つて氏の中國金融資本に關する造詣の深さを充分に紹介する事を得なかつたのは、わたしも誠に遺憾と思ひお許しを願う次第である。

〔池田 誠〕

#### 中國歷史簡編

吳 澤 著

民國三十四年七月 重慶峨嵋出版社初版

十一月上海再版 二九八頁

#### 中國史話

許 立 群 著

民國三十五年一月 上海野草出版社刊

一四六頁

兩書ともすでに昭和二十一年、牧田諦亮氏から拜借して早速一讀過したまま、紹介の機会を逸してゐた。いづれも中日事變のなほたけなはなる最中に書かれたものであらう。著者の立場はそろつて唯物史觀にもとづいてゐる。

中國歷史簡編の著者吳澤氏は、早く民國二十四年「傳說中國夏代之經濟考」(經濟學報一ノ一)や二十五年「中國先階級社會之商業與賦稅雛形考略」(中國經濟四ノ三)などの社會經濟史關係の論文によつて、その名を承知してゐた。上海の復